

TRANSITION TO HEALTH (103)

“ 新型コロナウイルス感染 ② ”

～ “ワクチン接種で『集団免疫』” は 幻想！ その1～

はじめに、今までのおさらい

デルタ株にかわって『オミクロン株』による市中感染が懸念され、ワクチンの『3回目接種』の前倒しが議論されている。

コロナワクチンの「有効性」に関してPfizer社は「感染予防効果は明らかになっていません」、安全性に関して厚労省は「安全性データは明らかになっていません」と文書で明示している。

哺乳動物を用いた治験が免除され、特例として緊急承認されたワクチンに対して、現在『人による治験』が進行中である（本通信No.100）と理解している日本人はどれだけのいるであろうか。

右に掲げた3表は、過去の本通信で使用したもの、また、私が産業医訪問時の安全衛生教育で用いたものである。復習を兼ね、しっかりと読んでいただきたいと思っている。TVなどのメディア、そこに出演する感染症専門家らは、発熱・倦怠感・局所の痛みなどの即時・早期の反応だけを「副反応」と見なしているが、最も心配されるのが右表に挙げた「中期・長期副反応」である。

若年者への接種が進められる中、5歳から11歳までの接種までもが検討されている。日本の将来を担う子ども達への接種であり、公の場できちんと議論されるべき問題であると私は考えている。さて、今号では「ワクチン接種拡大」と「集団免疫」に関するお話をさせていただきます。

集団免疫 (herd immunity) は幻想？ WHO：定義変更！！

ワクチン接種を推し進めて達成しようとしている『集団免疫』というものは概念であってエビデンスは無いようである。WHOは『集団免疫』の定義を、一年前、2020年11月に変更している。「ワクチンあるいは感染によって免疫がつく集団」から「感染」という言葉を外し、「ワクチンの接種によって免疫がつく集団」に変更した。以前「自然感染では15～20%で集団免疫がつく」という説があったが、「ワクチン接種**%で集団免疫がつく」という確かなエビデンスは何もない。WHOは、自然感染での集団免疫を意図的に否定し、「集団免疫はワクチンでのみつくもの」という風に意図して変更したのである。

「高い抗体価」だけが免疫ではない

ワクチンの『3回目接種』の前倒しが議論されているが、その背景には『高抗体価＝強い免疫力』という「固定観念」が存在しているように思われる。毎年・毎年、繰り返しの季節性インフルエンザワクチンの接種で、抗体産生の能力が次第に低下

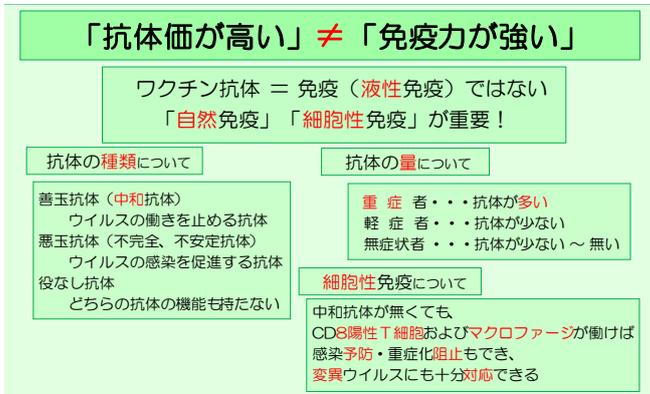
血栓症は正反応 ワクチン慎重派 ★ すべての年齢層に 遍く 発生し得る 正反応 mRNAは血流に乗って全身（副腎・脾臓・卵巣・精巣にも）の毛細血管に到達し、スパイクタンパクを産生し続け、血管内皮細胞を傷つけ、炎症を起こし、血小板を凝集させ、 血栓症 を発生させ、心筋梗塞・心不全、脳梗塞などの 心臓・脳血管疾患 などを引き起こす（失明も多い）。	mRNAワクチン スパイク蛋白の遺伝子 *遺伝子組み換え技術 コロナウイルスの スパイク蛋白 のmRNAをナノ脂質で抱合して筋肉注射する。 *ウイルスの 毒素 ・ スパイク蛋白 そのものを体内で作る。 *自然感染より 危険か！！ *増産された スパイク蛋白 を制御できなければ 死 を招く。 接種後死亡（副反応死）
--	---

ワクチンの中・長期副反応の発生メカニズム (2021.07)

ワクチン推進派 ★ 中・長期の副反応は無い mRNAは注射部位の筋肉細胞の中に留まる 筋肉細胞内で スパイク蛋白 が合成される スパイク蛋白は筋肉細胞の表面に発現する このスパイク蛋白を認識してB細胞が抗体を産生する。これが 中和抗体 である。	ワクチン慎重派 筋肉に接種された mRNA は、血流に乗って 全身 のあらゆる臓器（副腎・脾臓・卵巣・精巣にも）に拡散し、分布することが確認された。 各臓器の血管内皮細胞内で スパイク蛋白 を産生し続け、血管内皮細胞は傷つき、 慢性炎症 を起こし、 血小板凝集、血栓形成 などを引き起こす。 ？
慎重派) この抗体は 不安定抗体 ・ 不完全抗体 ・ 悪玉抗体 の可能性が大きく、 ADE (抗体依存性感染増強)、 変異株 出現を引き起こす。	心筋炎 心筋梗塞 心不全 脳梗塞 脳出血 血管病変 由来の消化器疾患 網膜の血管病変 失明 血液リンパ系疾患 皮膚病 不妊症 感染症 自己免疫疾患 癌 認知症 難病

することを複数の研究が示していた（2014～2016年）。血液中の抗体量と中和活性との間の相関関係は薄いとの研究もあった（2020.07）。また、「抗体の中和活性と感染予防とは関係がない」「重症度と抗体量との間に相関関係は認められていない」「重症者・死亡者は早期に抗体産生する」などの報告もあった。いずれも「抗体価が高い」＝「免疫力が強い」ではないことを実証している。

糖尿病などのように、感染症で重症化しやすい代謝異常を持っているヒトの場合、抗体そのものが炎症を引き起こす原因となりうると考えられる（不安定抗体、悪玉抗体）。過去の致死性インフルエンザウイルスの研究では、中和抗体が無くても、CD8陽性T細胞およびマクロファージが働けば、感染予防・重症化阻止もでき、また変異ウイルスにも十分対応できることが分かった。上の表にまとめてみたのでじっくりと見ていただきたい。



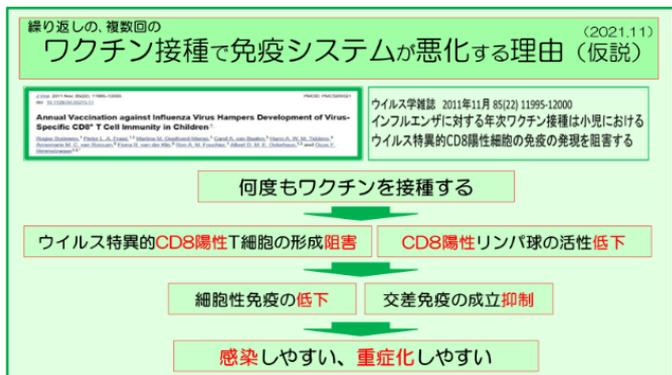
◆ ワクチン抗体は千差万別 あなたの体は“町工場”

あなたの体（＝町工場）は、有効な抗体（＝良質な製品）を作ることができるのだろうか。同じ設計図・仕様書、同じ資材を用いても、町工場によって、出来上がる製品の質の良悪は千差万別であろう。〇〇電子工業の製品は素晴らしいが、△▽工業の製品は粗悪品だということは当たり前になり得ることである。製品の数だけそろえても駄目である。良質な製品を作らなければいけない、不良品を出してはいけない。有効な抗体を作るには、食生活・運動習慣・睡眠・日光浴なども大切である。

さて、ワクチン接種で作られるあなたの抗体は如何なるものであろうか。実は悪玉抗体しか作れず、感染を促進してしまうかもしれない。「重症化する人の方が早期に抗体価が上がっていく」と報告されていたように、細胞性免疫の弱い人では、抗体はたくさん作られるものの、T細胞が十分機能せず、重症化しているようである。逆に、細胞性免疫の強い人では、中和抗体の助けを借りることなく、マクロファージ（大食細胞）やNK（ナチュラルキラー）細胞などのT細胞がきちんと働き、ウイルスを撃退することができ、感染予防も重症化阻止もでき、また、変異型ウイルスにも十分対応できると考えられる。

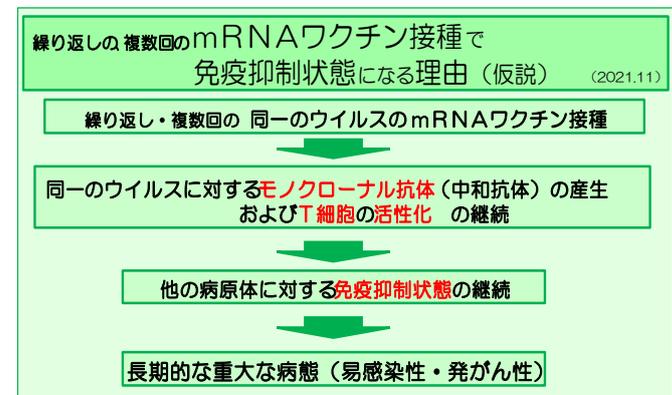
ワクチン接種で免疫システムが悪化する！？

2011年11月、ウイルス学雑誌に掲載されたオランダ人研究者の論文『インフルエンザに対する年次ワクチン接種は小児におけるウイルス特異的CD8陽性細胞の免疫の発現を阻害する』（タイトル邦訳・丸山）を基に、本健康通信で複数回にわたりお話をさせていただいてきた。この論文は、細胞性免疫が発達途上にある小児を対象とした研究であったが、その理論は大人にも通じるものと考えられ、右表のようにまとめてみた（個人的見解）。



mRNAワクチン複数回接種で免疫抑制状態に

同一のウイルスに対するモノクローナル抗体（中和抗体）が、高い抗体価を保ち続け、他のウイルスや細菌に対しては「免疫抑制状態」になってしまうと考えられる。実際にインドでは、ワクチン接種が進んだ時、真菌感染が多発し重症化していたことが報じられていた。常に高い抗体価（液性免疫）を保っておくことが重要ではなく、いざという時、細胞性免疫、自然免疫、交差免疫、あるいは免疫記憶が、きちんと働く、機能することが重要と思われる。



おわりに

「中国武漢から発生した新型コロナウイルスの存在は未だ確認・証明されていない。」と言えば、びっくりされる方も多いことでしょう。WHO、CDC、日本の厚労省、国立感染症研究所も、世界の60カ国以上の厚生当局は『新型コロナウイルスの実在を立証できない』のです。カリフォルニア大学、スタンフォード大学、コーネル大学の7つの研究室の研究者たちは、「COVID-19詐欺」としてCDCを告訴していた（本通信 No.95 参照）。「SARS-CoV-2、COVID-19」は「想像上・架空のウイルス、感染症」なのでしょくか。21世紀のこの科学の時代に、こんな非科学的なことが何故、起こっているのでしょうか。